

若手農業者を引き寄せる 「JAなすの」のアスパラガス生産

宇都宮大学農学部 教授 福田竜一

はじめに

小稿では、栃木県北部「JAなすの」のアスパラガス産地の調査を基に、アスパラガスを手掛ける若手農業者が増加している理由や、産地の課題と対策を紹介する。

1 アスパラガスを巡る情勢

2023年の全国のアスパラガス収穫量は24.6千トン(農水省「作物統計調査」)で、2013年と比べて▲16.9%の減少であった。他方、2023年のアスパラガスの輸入量は5.7千トン(財務省「貿易統計」)であるが、近年は円安の影響で輸入価格が上昇しており、実需者の国産志向も相まって、輸入量は2013年と比べて▲49.0%の減少であった。

国内の主要産地では、2023年のアスパラガス収穫量1位が北海道(3,510トン)、次いで熊本県(2,270トン)、佐賀県(2,250トン)、そして栃木県(1,700トン)の順となっている。同年の収穫量上位10道県の増加率(2013年比)を見ると、栃木県の増加率は36.0%と最も高く、福岡県(9.5%増)、山形県(7.9%増)、熊本県(2.7%増)以外の6道県は減少であった。

2 JAなすのにおけるアスパラガス生産

JAなすののアスパラガス出荷量は、現在年間800トン程度で、栃木県全体の4～5割を占めている。同JA管内では、1993年に酪農家らが堆肥の有効利用を目的としてアスパラガス栽培を開始し、米の転作対応等が求められて

いた農家の新たな収益作物としてアスパラガス栽培が広がった。

JAなすのでは、アスパラガスのブランド化を推進しており、2010年にブランド「那須の高原アスパラ」を商標登録した。品質管理を徹底するため、管内のアスパラガスはすべてハウス栽培としている。また出荷期には、販売先からの電話による細かい要望にも対応する「小回りの効く」出荷も行っている。

3 アスパラガス生産の魅力

JAなすのアスパラガス生産部会は2000年に12名で発足したが、2024年の部会員数は99名と、25年間で8倍も増加した。部会員の年齢構成は、20～40歳代が3割強を占めている。彼らの多くが農家の後継者だが、非農家の出身者もいる。筆者が聞き取りしたアスパラガスの若手生産者には、他地域で就業後、実家の農家へUターン就農した方、結婚を期に就農した方、農業大学校卒業後に就農した方、祖父母の農地で就農した方がおられた。

アスパラガス経営は、栽培面積30a、作業人数2名にプラス収穫・調整作業2名程度であれば、農業所得300万円程度が見込める。単価の高いアスパラガスの農業所得はJAなすのの主要園芸品目の中でも高めであり、アスパラガスを農業経営の柱とする生産者も多い。

品種等にもよるが、アスパラガスは苗を植えると10年以上は同じ苗から収穫するので、毎年の苗作り作業がなく、冬場にまとまった



写真1 若手生産者のアスパラガスのハウス（栃木県那須塩原市。筆者撮影）

休みが取れる。冬場には冬野菜等で所得をあげる方もいるが、趣味のスキーやゴルフ、あるいは家族旅行などを楽しむ方もいる。アスパラガスは他品目と比べてワークライフバランスが取りやすく、趣味や家族と過ごす時間を大切にしている若い世代にとって魅力となっている。

JAなすのでは、アスパラガスの新規生産者への支援も充実している。部会員が新たにアスパラガスのハウスを建設する際は、他の部会員が手伝いをする取組みを毎年実施している。またアスパラガス就農1年目の者には、先輩の生産者が1年間生産指導を行う制度がある。こうしたサポート体制の充実や部会員同士の助け合いは、アスパラガスの就農希望者を後押ししている。

4 人手不足や資材価格高騰等への対応

アスパラガスでは収穫や選別・調整作業に人手が必要であり、人手不足の深刻化は規模拡大の制約にもなる。そこでJAなすのは、2024年に1日最大約5トンの処理能力を持つ最新の選別施設を導入した。選別施設の導入で、アスパラガスの労働時間の46%を占める選別・調整作業の負担軽減の効果等が期待さ



写真2 JAなすのが導入したアスパラガス選別施設（栃木県大田原市。筆者撮影）

れている。

またハウスの導入には国や県の補助事業を活用しているが、最近の資材価格高騰に加え、農業関係予算の削減もあり、生産者の自己負担額は増加している。設備投資の負担増は新規参入や規模拡大の障壁になることから、JAなすのでは独自に「園芸作物拡大支援事業」を実施しており、意欲ある生産者への支援を通じて、産地の振興と農業所得のさらなる向上を目指している。また近年では気候変動の影響で高温や病害虫の対策も重要となっており、中にはIoT技術の導入による栽培管理の省力化を試みる大規模経営体もある。

おわりに

若い世代が農業を選ぶ上で所得は最も重要な点であるが、余暇を重視したライフスタイルの実現や、農業者同士の助け合いと絆の強さなども重要なことが調査から明らかにされた。今後、若い農業者がアスパラガス産地をどのような発展へと導くのか、引き続き注目していきたい。

（ふくだ りゅういち）